

上千堂遺跡

1997

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

上 千 堂 遺 跡

1997

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター



遺跡近景（北東から）

例　　言

- 1 本書は1996年度に発掘調査を実施した、団体営土地改良総合整備事業（上千堂地区）に係る遺跡（広島県御調郡御調町大字千堂 574-1, 587）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 山澤直樹・岡野将士が担当した。
- 3 整理作業及び遺物実測・遺物写真は上記の者と山田繁樹が担当した。
- 4 本書の執筆はⅠ・Ⅲ～Ⅴを山田、Ⅱを鈴治益生が行い、編集は山田が行った。
- 5 本書で使用した遺構の略記号SBは住居跡である。
- 6 挿図中の遺物断面は陶磁器、土師質土器ともに白抜きで表わしている。
- 7 図版・挿図の遺物番号は同一の番号である。
- 8 第1図で使用した地形図は国土地理院発行の地形図（1:25,000・甲山）を使用した。第2図は久井町森林基本図10-1（1:5,000）を、第3図は団体営土地改良総合整備事業上千堂地区計画平面図（1:500）を使用した。
- 9 本書で使用している方位はすべて国土座標Ⅲ系によるものである。

目 次

I はじめ	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	6
IV 遺構と遺物	8
V まとめ	11

(巻頭図版) 遺跡近景（北東から）

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	3
第2図 周辺地形図 1 (1:5,000)	5
第3図 周辺地形図 2 (1:500)	6
第4図 遺構配置図 (1:200)	7
第5図 SB 1 実測図 (1:60)	8
第6図 出土遺物実測図 (1:3)	10

図 版 目 次

図版 1	a 遺跡遠景（北東から）
	b 遺跡近景（北東から）
	c 調査区全景（東から）
図版 2	a SB 1 土層断面（北から）
	b 同 完掘状況（南東から）
	c 同 完掘状況（北から）
図版 3	出土遺物

I はじめに

御調町の北東部に位置する千堂地区は、東部を府中市に接し、地形は急峻な山に囲まれた農村地域である。このため、農地の大部分は傾斜地を利用しており、農道の幅員や農地への連絡路は近時の機械化の時代に対応するには十分な状況ではなかった。また、カントリーエレベーターなど農業施設の主なものは町の中心部に集中しており、農作物の搬入・搬出にあたってもより効果的な農道の整備が急がれていた。このため、区画整理事業とあわせて団体営土地改良総合整備事業の計画がなされた。

1994(平成6)年10月に御調町から広島県教育委員会(以下「県教委」という。)あてに、事業計画地内の文化財等の有無及び取扱いについての協議があった。県教委は現地踏査の結果、要試掘地点が1か所ある旨を1995年8月に回答した。同年11月、県教委は試掘を実施し、その結果、上千堂遺跡(420m²)の存在を確認した旨を御調町に回答した。県教委・御調町教育委員会と御調町は遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難なことから発掘調査を実施することとなった。御調町は県教委に発掘調査を依頼し、これを受けた県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター(以下「埋文センター」という。)と調整した結果、埋文センターが御調町と委託契約を締結し、発掘調査を行った。

発掘調査は1996年4月8日から開始し、5月10日に終了した。調査終了時には遺跡見学会を開催し、調査の成果を報告する予定であったが、準備がととのわず行うことができなかつた。

本書は、以上のような経過を経て行われた発掘調査の成果をまとめたものである。

調査にあたっては、御調町(農地開発課)、御調町教育委員会をはじめ、地元の方々の御協力をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

上千堂遺跡が所在する御調町は、家具の製造などで知られている府中市の西隣に位置し、市街地は府中市から久井町を経由して豊栄町に通じる国道486号と尾道市から甲山町を経て三次市に至る国道184号とが交差する市を中心に形成されている。町域内には、芦田川の支流である御調川が東西方向に流れしており、これに沿って狭長な沖積地が形成されている。また、周囲には標高300~400mの山々が連なっている。

上千堂遺跡がある千堂地区は、御調川の支流山田川を通り、市から4kmほど北側の山間部に位置している。また、同地区には標高220~390mの緩斜面が広がっており、その多くが棚田状の耕作地として利用されている。

御調町の埋蔵文化財の分布状況を概観すると、今までのところ、旧石器や縄文時代の遺跡・遺物は確認されていない。

弥生時代の遺跡としては、弥生土器や太形蛤刃石斧が出土した箇所が比較的多く確認されているものの、発掘調査がなされていないことから、これらの遺跡の実体については明らかではない。出土した弥生土器には中期に遡るものがあるが、その多くが後期のものであることから、後期の時期から集落が盛んに形成されていったことがうかがえる。

特筆すべき遺物としては御調町貝ヶ原から出土した特殊器台形土器がある。この土器は、1968年御調川を望む低丘陵から土取り工事の際に単独で出土したもので、付近に墳丘墓のような埋葬施設があったことが想定されている。土器は口縁部が欠損しているものの、その他の部分の遺存状況は極めて良好である。残存の高さは68.5cm、脚部最大径41.1cm、胴部最大径23cmで、胴部の中央部から上半部にかけてやや胴張りのエンタシス状を呈する。胴部には3条の文様帯と4条の間帯があり、文様帯には斜行の沈線や綾杉文、鋸歯文などが施されおり、器壁表面には赤色の顔料が塗布されている。これらの特徴から、特殊器台形土器のなかでは古い時期のものと考えられ、吉備における特殊器台形土器編年の立坂型に併行すると考えられる。

次に古墳時代の遺跡としては、数多くの古墳・古墳群の存在が確認されているが、発掘調査されたものは少ない。古墳の主体部には箱式石棺を有する前半期のものと、横穴式石室を有する後半期のものがある。前者の例としては、1970年に発掘調査が行われた高尾古墳群と後口山古墳がある。高尾古墳群は2基の古墳からなり、第1号古墳の調査が実施されている。主体部の箱式石棺の蓋石と側石の内側には赤色顔料が塗布され、内部からは頭骸骨をはじめ、脊椎骨や大腿骨の一部が出土したが、副葬品はみられなかった。後口山古墳の主体部は床面に敷石を施した箱式石棺で、赤色顔料が塗布された頭骸骨が出土している。また、副葬品として碧玉製の管玉やガラス小玉が出土した。後者の発掘調査例としては、1987年に調査された梅の木第4号古墳などがあるが、未報告である。また、調査はされていないが耳環や須恵器などが出土している貝ヶ原古墳群などがあり、これらの遺物から横穴式石室を埋葬施設とする古墳については、6世紀後半以降に



- ① 上千堂遺跡
- ② 松尾窓跡
- ③ 土部谷西平遺跡
- ④ 小猿古墳
- ⑤ 楊屋谷遺跡
- ⑥ 中倉谷古墳
- ⑦ 大畑谷古墳
- ⑧ 後呂谷遺跡
- ⑨ 掛田遺跡
- ⑩ 高尾古墳
- ⑪ 土木屋遺跡
- ⑫ 高尾遺跡
- ⑬ 後口山遺跡
- ⑭ 後口山古墳
- ⑮ 神田神社境内遺跡
- ⑯ 貝ヶ原遺跡
- ⑰ 龍が平遺跡
- ⑱ 山田遺跡
- ⑲ 寺屋敷遺跡
- ⑳ アベノ木遺跡
- ㉑ 河崎古墳
- ㉒ 牛の皮城跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

築造されたことが明らかとなっている。

古代の遺跡については、白鳳時代から平安時代初期にかけての瓦類が出土した本郷平廃寺跡⁽⁴⁾がある。本寺跡は、1985年度から4年次にわたり確認調査が実施され、塔の北側に金堂が配された、いわゆる四天王寺式に近似した伽藍配置であることが明らかとなった。また、塔跡から20m南側で石垣状の遺構が検出されており、基底部を乱石積みした土壘状の遺構の可能性が考えられている。寺域については、塔・金堂跡の西方に谷筋が湾入し、また、東側や西側に遺構が広がる様相がないことから、塔や金堂を中心に1町四方ほどであったと推定されている。

出土した瓦類には、大和の石川寺跡から出土した瓦類に酷似したものがある。また、瓦類以外の出土遺物としては正六角形に復元できる塔がある。表面には豊表の圧痕が、裏面には同心円文の叩き目が残っていた。その他、塑像の螺髪と考えられる土製品も出土している。

なお、本寺跡の500m西側には「長院」、「倉戸」という地名が残っており、この一帯に郡衙が存在していた可能性が指摘されている。

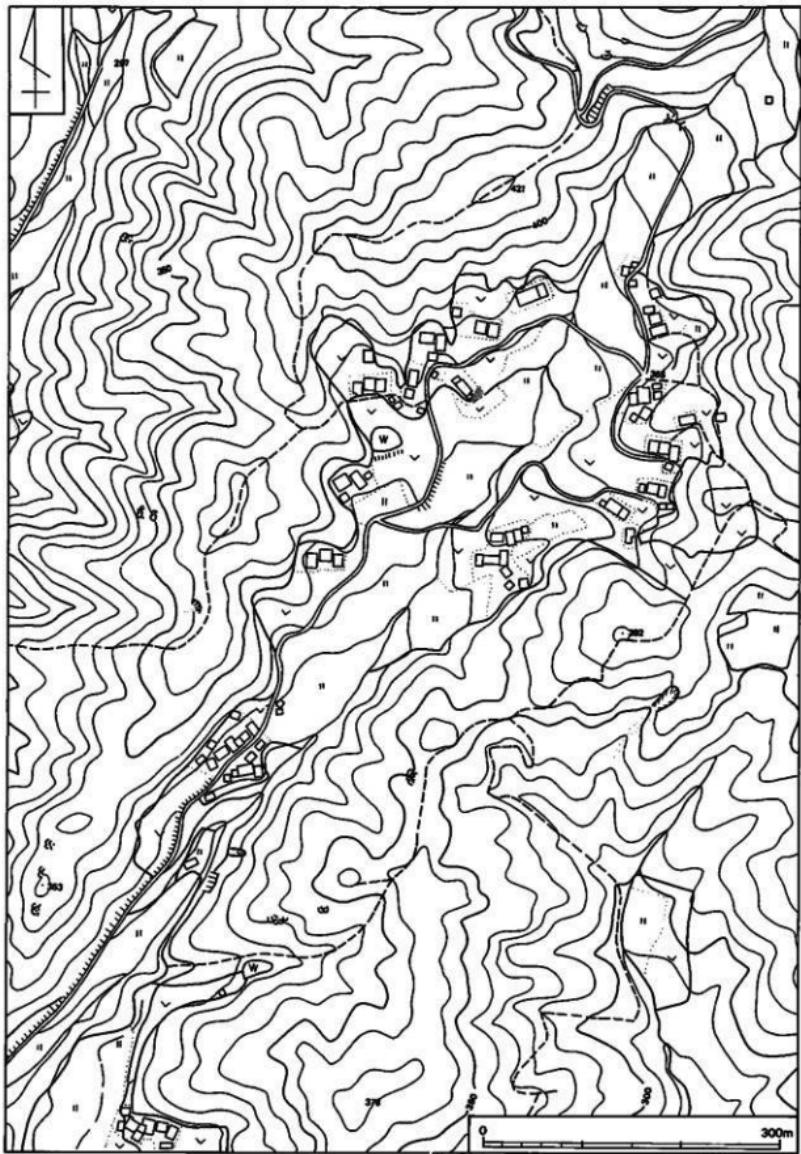
古代において本地域は、備後国府が置かれていたと推定されている府中市の「葦田駅」から「者度駅」、「真良駅」を通過し、安芸国に通じる山陽道沿いに当たる。「者度駅」については、現在の甲山町字津戸に比定する説と御調町市に比定する説があるが、宇津戸は大きく北側に迂回することから市とする説が有力視されている。

中世になると本地域は、現在の甲山町に設置された高野山根本大塔領の荘園である大田庄とその倉敷地が置かれた尾道との交通路として発達した。また、戦国期には現在の三次市に勢力を置いた三吉氏が南下し、周辺地域を支配下に置いたようである。この時期の山城としては御調町大町の牛の皮城跡や市の雲雀城跡がある。牛の皮城跡は南北に郭群や畝状堅堀を配した大規模な山城であり、また雲雀城跡は郭群、堀切等を配した山城である。

以上のように御調町内には多くの埋蔵文化財が確認されており、少なくとも遺跡・遺物が確認されている弥生時代中期以降、人々の営みが続いていることは明らかである。

註

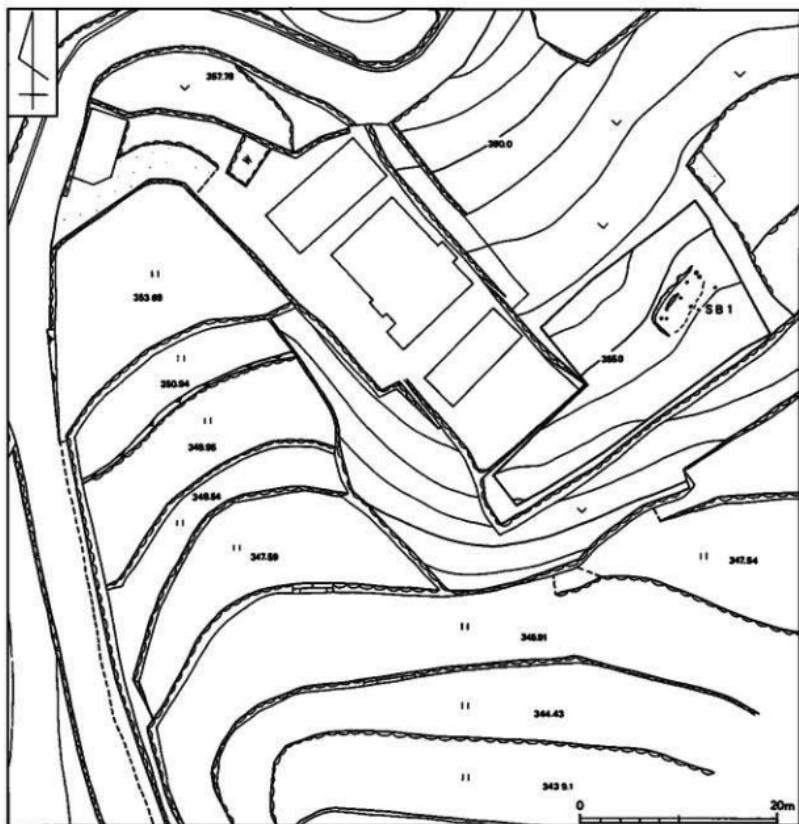
- (1) 潟見 浩 「貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器」「広島県文化財調査報告」第17集 広島県教育委員会 1991年
- (2) 御調町教育委員会 「御調郡御調町高尾古墳発掘調査報告 付 御調町後口山古墳発掘調査概報」 1971年
- (3) (2) と同じ
- (4) 広島県御調町教育委員会 「本郷平廃寺」 1989年
- (5) 広島県教育委員会 「広島県中世城館遺跡総合調査報告書」第3集 1995年
- (6) (5) と同じ



第2図 周辺地形図1(1:5,000)(アミ目は調査区)

III 調査の概要

本遺跡は、国道184号沿いに南下し町の中心部で芦田川に合流する支流である山田川の上流域に位置している。千堂地区は周辺を急峻な山々に囲まれており、谷あいの中央付近で谷に向かって東側からのびる低丘陵によって北側の上千堂地区・南側の下千堂地区に分かれている。上千堂地区の集落は山裾に形成され、眼下には谷あいに展開する棚田状の水田が広がっている。本遺跡は谷川に向かう南東斜面に立地している。



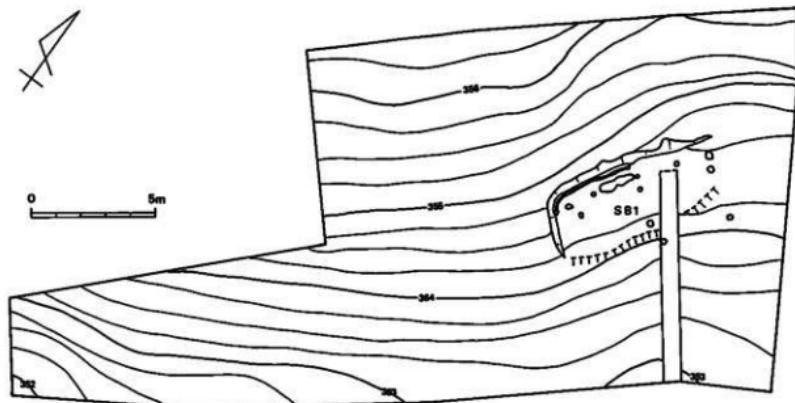
第3図 周辺地形図2 (1:500)

発掘調査前の現状は畠地であり、周囲は石垣で囲まれていた。発掘調査は、試掘の結果から遺構確認面までが斜面下方側に向かって深くなつており相当の土量が予想されたため、耕作土など遺構確認面直上まで重機を使用して排土除去作業を行つた。

調査区内の基本的な層序は耕作土・整地土・黄褐色から茶褐色砂質土である。土質は花崗岩パイラントに近似している。整地土は斜面下方にいくにしたがつて厚くなり、部分的に版築状に灰褐色砂質土と赤褐色砂質土で整地されていた。また、調査区の北西側は宅地と接し、それ以外は崩壊の危険があつたので石垣部分を控えて掘り下げた。

調査区内は、傾斜に平行した基準線を軸として区を設定し掘り下げを行つたが、予想外に遺物は少なく、陶磁器を中心にして土師質土器の皿・鉢・土鍋片が出土した。陶磁器は破片が多く、土師質土器も2点が図化できた。

調査の結果、調査区の南西半分では遺構は存在しておらず、北東側で削り出した平坦面に柱穴を10個確認した。この住居跡(SB1)は、斜面に平行して長く削り出され、壁溝も南西側で部分的にみられるのみであり、柱穴も壁に沿つて5個(4間)並んでいることから竪穴住居跡ではなく掘立柱建物跡と考えられる。住居跡内からの遺物は1点のみで時期は明確にできない。



第4図 遺構配置図 (1:200)

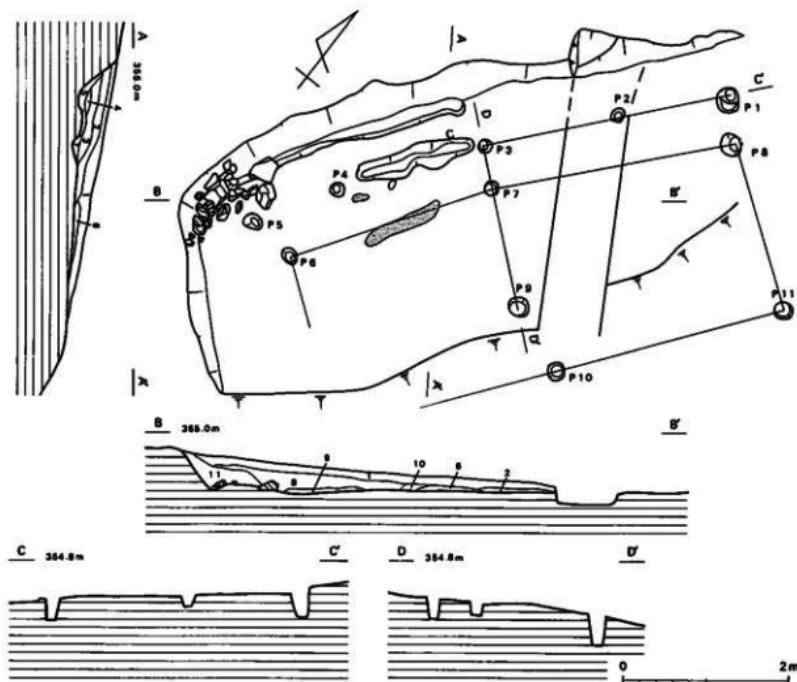
IV 遺構と遺物

検出した遺構

SB1 (第5図、図版2, a・b・c)

調査区の中央部からやや北東よりに位置している。平面形や規模・柱穴の配列などから竪穴住居跡ではなく掘立柱建物跡が想定でき、斜面を削り出した平坦面に建物を建てていたと思われる。また、建物の廃絶後は土層の観察から自然堆積によって埋まったことがうかがえる。

斜面下方側の床面が流失しているため、本来の規模は不明であるが、床面上で北西側の壁際が



SB1

- | | | |
|----------------------|-------------------|----------------------------|
| 1 暗灰褐色（粗粒が多い） | 5 灰黄色土 | 9 灰褐色土（灰色強い） |
| 2 暗灰褐色（砂粒が1に比べ細かい） | 6 黄褐色土（地山ブロック） | 10 7と8層の互層 |
| 3 灰褐色土（茶褐色土が混入） | 7 赤褐色土（焼土・炭化物を含む） | 11 淡赤褐色土
(焼土・炭化物・角礫を含む) |
| 4 灰褐色土（茶褐色土がブロックで混入） | 8 暗灰褐色土（茶色帯びる） | |

第5図 SB1実測図 (1:60) (アミ目は焼土)

6.8 m、南西側の壁際で 2 m の範囲で残っており、形状は長方形を呈していたと考えられる。確認面からの深さは 50 cm が最大で、北側と南側で壁が消滅している。壁際には中央から南にかけて壁溝が部分的に残っている。幅は 15~20 cm、床面からの深さは約 5 cm と浅い。また、壁溝の北側隅の南東側に幅 20~30 cm、長さ約 1.5 m、床面からの深さ約 5 cm の溝状の掘り込みがあり、埋土は焼土と炭化物を多量に含んでいる。

柱穴は 10 個確認した。いずれも円形で径は 20~35 cm、深さは床面から 10~35 cm であるが、標準で換算すると P9~P11 は深く、P2 と P10 では約 45 cm の差がみられる。柱穴の対応関係は明確でなく、ひとつには P1・P2・P3 と P3・P7・P9 が直線的に並んでおり、建物の可能性も考えられる。また、壁に沿って P1~P5 の直線的でない並びがみられるが、この列に対応する柱並びはみられない。ただ、P6~P8 の並びが P1~P5 の並びの東側に近接しているものの、P2・P4 に対応する柱穴がないことから直接には関連しないと考えられる。可能性の高いものとして、柱間は広くなるが P6・P7・P8・P11・P10 の（P6 に対応する柱はない）5 個を建物の柱穴とすると P1~P5 が、底として想定できる柱並びが考えられる。いずれにしても柱穴の数が少なく明確にはできない。

床面は北部と南部では約 30 cm の高低差があり、比較的緩やかに南へ傾斜している。P7 と P6 周辺には焼土がみられた。

遺物は、覆土中に土鍋口縁部片（16）が 1 点出土した。

そのほか、南西隅で角礫が集中してみられ、当初は造りつけのカマドと考えていたが、石材が全て熱を受けていることや煙出し部にあたる施設が存在しないことからカマドではないと思われる。この集石が SB1 の平坦面に伴うものかどうかは明らかでなく、性格は不明である。

出土した遺物

遺物は、先にも述べたように遺構から出土したものは 1 点しかなく、全て表土あるいは整地土中から出土したものである。第 6 図の 10・12・13 は陶器の底部、15 が鉢、16 が土鍋、17・18 が土師質土器皿のほかは、1~9・11・14 が肥前系の陶磁器である。遺物は完形品ではなく、計測値は 12・13 の底部以外はすべて復元値である。

出土遺物（第 6 図、図版 3）

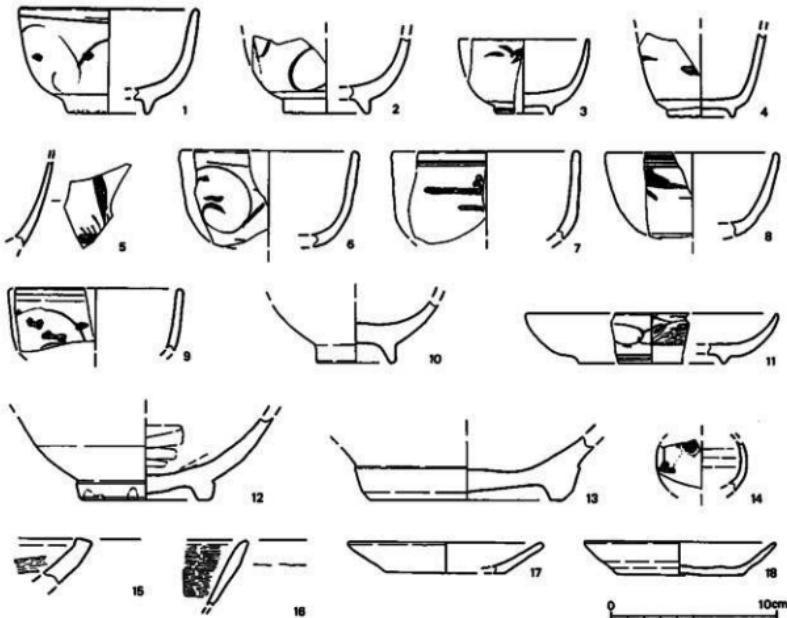
1~10 は碗である。このうち 1・2・6~9 はいずれも陶磁染付で、1・2・6・9 は外面に草花文が描かれている。1 は底部に 1 本の圓線があり、2 は 2 本である。1 は口径 10.6 cm、底径 4.8 cm、器高 6.3 cm で、吳須の発色は黒味を帯びている。2 は底径 5 cm で吳須の発色は黄緑色を帯びている。6~9 の口径はそれぞれ 10.4 cm、11 cm、10.2 cm、10 cm である。

3・4・11・14 は染付で、3 は口径 7.7 cm、底径 3.3 cm、器高 4.5 cm で外面は筆文と思われる。4 は底径が 4 cm、高台は釉ハギで、施釉に不均一な部分があり厚くなっている。5 は体部片で花文を描いていると思われる。14 は瓶で胴部径 5.4 cm である。外面は草花文が描かれている。10 は底径 4.6 cm で疊つけは釉ハギ、釉は全面にあり、細かい貫入がみられる。胎土から瀬戸美濃系と思われる。11 は染付皿で口径 15 cm、底径 8.8 cm、高さ 3 cm で、外面には唐草文、見込みには半菊花

文が描かれている。底部外面に1, 高台外面に2, 高台内面に1, 見込みに1本の圈線がみえる。12・13の器形は不明である。12の底径は8cmで外面は無釉, 内面は鉄釉で, 成形痕が残る。13は底径11.4cm, 外面には底部を含めて鉄釉が, 内面には白濁に発色した釉がみられる。

15は鉢の口縁部と思われ, 内面には成形時の痕跡がみられる。外面は削りの後, ナデている。色調は灰白色で胎土は0.5~1mmの砂粒がめだつ。焼成は良好である。16はSB1の覆土中から出土した遺物で, 土鍋の口縁部と思われる。焼成は良好で, 色調は赤褐色で外面の口縁端部付近は2次焼成を受けている。内面は幅1.7cmに12~14条の刷毛目が残っている。胎土は密であるが, 3mm程度の砂粒を含んでいる。

17・18は土師質土器の皿で, 17は口径11.7cm, 底径7cm, 器高1.8cm, 焼成は良好でなく外面が赤褐色, 断面が黒灰色である。調整は不明である。18は口径11.4cm, 底径7.6cm, 器高2cmで, 焼成は良好, 胎土は密, 色調は赤褐色である。内外面ともナデて仕上げており, 底部には板目が残っている。



第6図 出土遺物実測図 (1:3)

V ま　　と　　め

調査の結果、確認した遺構は掘立柱建物跡 (SB 1) 1棟である。SB 1の時期はこれに伴う遺物が出土していないため明らかでない。整地層で出土した遺物のうち、肥前系陶磁器・瀬戸美濃系陶器が17~18世紀代のものと考えられる。鉢・土鍋・土師質土器の皿は、地域色が強く形態に違いがみられるため、他地域の編年で時期を想定することは困難である。しかし、当地域では良好な資料に恵まれていないので、あえて備後南部の草戸千軒町遺跡の編年でみると、土師質土器の皿や土鍋はIV期頃(15世紀前半から16世紀初頭)に相当すると思われる。畠地の造成時期を整地層中の遺物で判断をすれば、整地は2回行われ、土師質土器は下層から出土していることから、ここではSB 1の時期を一応16世紀代以前のものとしておきたい。

千堂地区は江戸時代の文政8(1825)年に完成した『芸藩通志』によると、戸数27戸、133人があり、現在と基本的に変わりなく比較的古い集落であることがうかがえる。しかし、千堂地区には中世以前に溯源する遺跡はまだ確認されていない。一方、山を挟んだ北西側の集落地では発掘調査によらないが、いくつかの古墳や遺跡が発見されている。そのうち、小猿古墳については、耕作中に横穴式古墳の天井石と思われる石を除去したところ、須恵器の蓋杯・高杯・提瓶が出土している。また、中倉谷古墳は災害によって横穴式石室の一部が崩壊し、須恵器・土師器と直刀が數本出土している。いずれも古墳時代後期の古墳と思われる。さらに周辺の畠から弥生時代後期の土器が表採された後呂谷遺跡や梶屋谷遺跡がある。生産遺跡としては1949年頃の県道工事の際に、須恵器を焼いた松尾窯跡が発見されている。北西側の集落地は地形的にみて千堂地区と同様の環境であり、これらの遺跡や古墳の立地をみてみると、丘陵上ではなく丘陵と谷部との変換点から山裾に立地している。こうした状況から考えると、北西側の集落地と同様に千堂地区にも現在の水田・畠地や宅地の下層に遺跡の存在している可能性が高いと思われ、今回の調査からもそのことがいえるであろう。

中世においては、山城・館などに比べ集落跡の調査は少ない。本遺跡と時期的に重複する福山市の平松1号遺跡・春日南遺跡は、ともに丘陵の斜面に集落を形成しており、住居跡の平坦面を削り出し、掘立柱建物跡を建てる形態は本遺跡と大きな違いはみられない。平松1号遺跡では建替えが認められ、4期にわたる存続期間が想定されている。春日南遺跡では住居跡以外に貝塚や墓が確認されている。性格としては、同時に調査された福山市の大塚土居前遺跡が掘立柱建物跡の規則的な並びから館跡として推定されているのに対して、平松1号遺跡・春日南遺跡は沿岸部における一般的な集落とされている。

上千堂遺跡は調査範囲が限られていたが、先に述べたように遺跡の範囲が広がる可能性も考えられる。現在の段階では集落の構成までは復元できないが、山間部における一般的な集落の一部であることが把握される。生産基盤は『芸藩通志』に戸数以上の牛馬数が記録されており、水田経営がなされていたと考えられる。その開始時期を弥生時代・古墳時代まで溯らせる根拠はない

が、少なくとも本遺跡の時期には、現在に近い村落形態が築かれていたのではないかと思われる。そして眼下に広がる棚田状の水田を望めば、先人の残した努力と技術の結晶をうかがい知ることができる。

参考文献

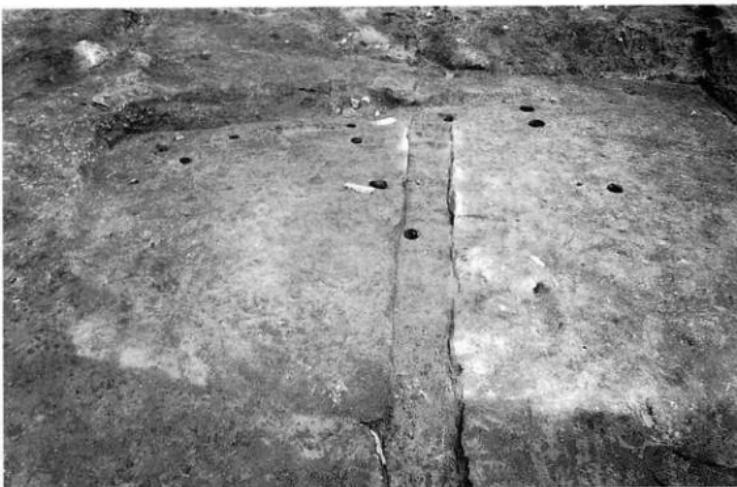
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅰ 一北部地域北半分の調査一』 1993年
建設省福山工事事務所・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(II) 1984年



a SB1 土層断面
(北から)

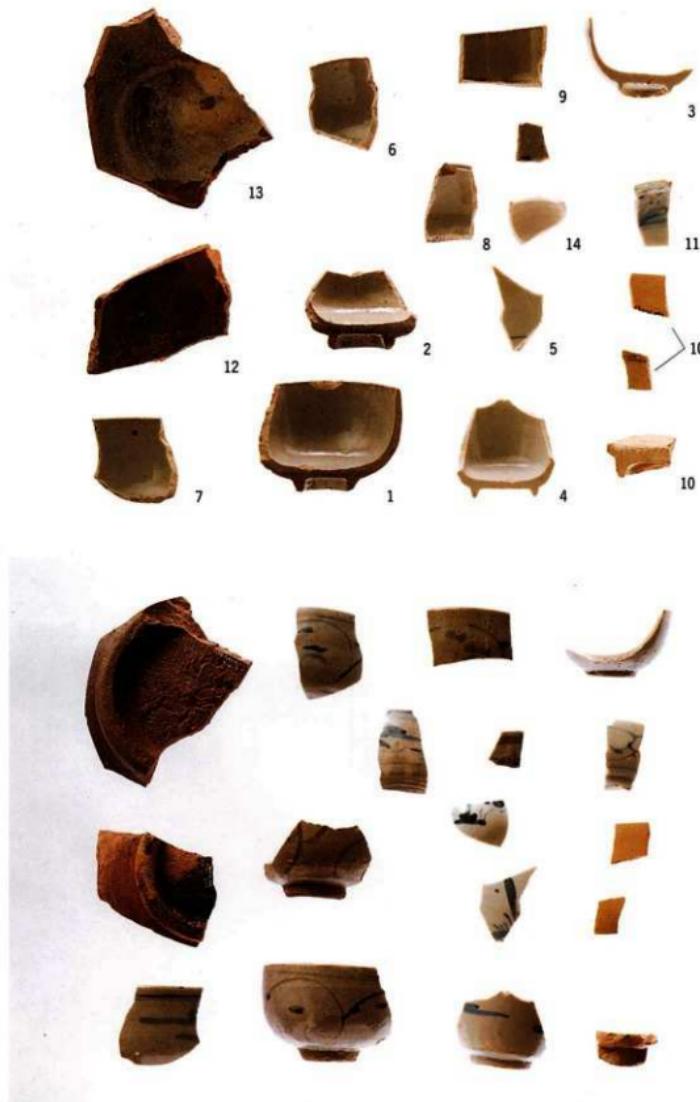


b 同 完掘状況
(南東から)



c 同 完掘状況
(北から)





出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみせんどういせき							
書名	上千堂遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第153集							
編著者名	山田繁樹・鶴治益生							
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ・・・	東經 ・・・	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
上千堂遺跡	広島県御調郡 御調町字千堂	34441	—	34度 33分 06秒	133度 09分 30秒	町調査分 19960408~ 19960830	420 m ²	団体営土地改良総合整備事業(上千堂地区)に係る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
上千堂遺跡	集落跡	室町時代後半 安土桃山時代	住居跡		肥前系陶磁器			

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第153集

上千堂遺跡

発行日 1997(平成9)年3月31日

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082) 295-5751

印刷所 電子印刷株式会社